

心の栄養剤No132 【見つけ出そう、自分の才能を】

先日発表された文部科学省の学校基本調査によると、2013年度の不登校の小中学生が約12万人もいることが分かった。

1997年に初めて10万人を突破した時、「**ここまでくると、問題は学校に適應できない子供にあるのではなく、子供の現状に適應できていない学校教育にあるのではないか**」という議論があったのを記憶している。

それから学校もいろいろと対策を重ねてきたと思うが、少々の改善策ではもう対応できないほど、子供たちが多様化しているのではないかという気がする。

「もはや改善では済まない。必要なのは教育界の革命です。ところが、根本的に変えることができないのは、今実権を握っている人たちがそれを一番嫌うからです」と言うのは、イギリス人の教育アドバイザー、ケン・ロビンソンさん。

長年、イギリスの教育界に多大な貢献をした人で、「ナイト (Sir)」の称号をもらっている。今はアメリカに移住して、アメリカの教育の現状に苦言を呈している。

彼の講演映像がネット上に公開されている。アクセス件数は2700万回を超える。そのテーマは「**学校教育が子供の創造性を殺している**」と過激だ。

話の中に、シリアン・リンというダンサーの話があった。シリアンは小学生の頃、落ち着きのない子供だった。10分も椅子に座っていらなかった。授業が始まると席を離れて教室を歩き回るのだ。他の生徒の学習に支障をきたすということで、問題児扱いされていた。1930年代のことである。当時はADHD（注意欠如・多動性障害）などという概念はなかった。

学校は両親に、この子が病気であり、治療が必要であると主張した。精神科を受診すると、精神安定剤を処方された。何軒か病院をはしごした後、一人の専門医と出会った。

病院の相談室で母親の話を聞いた後、その医師はシリアンを一人部屋に残して母親と部屋を出た。その際、医師はラジオのスイッチを入れた。ラジオから音楽が流れた。医師は母親に言った。「中を覗いてみてください」シリアンがいつものように音楽に合わせて体を動かしていた。医師は続けた。「彼女は病気ではなく、ダンサーなんです。

ダンススクールに通わせてあげてください」

当時のことをジリアンは覚えている。「母は私をダンススクールに連れて行ったの。どんなに楽しかったか言葉じゃ表現できないわ。そこには私みたいな子がたくさんいたの。みんなじっとしてられない子ばかり。私は考える時にまず体を動かさなくちゃいけないの」

ジリアンはロイヤルバレエ学校に入学し、卒業後は着実にキャリアを積み、「ジリアン・リン・ダンスカンパニー」を設立した。

その後、『オペラ座の怪人』や『キャッツ』など、歴史に残るミュージカルの振り付けを担当し、世界中の人々に感動を与える仕事をするまでになった。

「あの医師に出会わなかったら私は薬漬けにされ、おとなしくなっていたかもしれないわね」と当時を振り返る。

ケン・ロビンソン氏は言う。

「人類は多くの国が石油などの天然資源を求めてきたが、一番発掘しなければならないのは人間の内に眠っている資源です。多くの人が自分の才能が何か分らないまま一生を過ごしています」

「内なる資源は天然資源と同じで埋もれています。だから探さないといけないのです。それが教育の一番の役割なのですが、現状はそうなっていません」

上からの改革はなかなか難しい。でも自己改革なら今すぐにでも始められるのではないか。例えば、「自分には何の取り柄もない」「何の才能もない」という思い込みを取り払うことだ。「ない」のではなく、「まだ見つかっていない」だけ

「探し物は何ですか？」と聞かれたら、「自分の才能」と返してみるのもいいかもしれない。この社会の多様性は、一人ひとりの才能によって支えられているのだ。

先日、「子供の未来を考える」という薬害についての講演会に出席した時に、最近～業界には**「発達障害バブル」**という言葉があるほど、病気というレッテルを子供に付け、多くの「精神系の薬」が出されているという恐ろしい話を聞きました!!

まずは、子供さん達にとって一番身近な存在である御家族の皆様の対応のしかたが一番大切だと思います。

※今月～夏休み真っ最中ですが、是非、**「自分の才能」を探すというテーマ**に親御さん共々、向かい合う時間を作ってお過ごし下さい!!

